青函みらい会議パネルディスカッション 議事録

奥 平　理 准教授
（北海道教育大学函館校）

福田 裕二 主査（学芸員）
（函館市教育委員会文化財課兼世界遺産登録推進室）

ファシリテーター
田中青森財務事務所長

櫛引 素夫 教授
（青森大学社会学部）

若井 敬一郎 会頭
（青森商工会議所）

【田中所長】
　第一回青函みらい会議では、「縄文時代から学ぶSDGsと地方創生～Withコロナの青函未来像」と題して青函地域から4名のパネリストにご参加いただいております。両地域の持続的発展地域活性化のためには何が必要か、また約1万年以上続いた縄文文化とSDGsの17の達成目標で関連付けできることは何かないかなど議論できればと思っております。
　それでは、これよりパネルディスカッションを開始いたします。最初に、本日パネリストを務めていただく皆様より簡単に自己紹介をお願いいたします。

【奥平准教授】
　北海道教育大の奥平です。専門は観光学・地理学で、函館からずっと地域を見つめています。
　観光学の中にも、SDGsという話が当然出てきます。今日のテーマの縄文の世界遺産指定に向けての取組みということで言えば、まさにエコツーリズムの概念が北東北・北海道に当てはまるのではないかと思います。本日は、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に決まることを見据えた動きについてお話したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【櫛引教授】
　青森大学の櫛引と申します。新幹線を研究して本を出したりしており、その流れの中で青函地域を改めて見直しています。青森大学ではSDGs研究センターにも所属しており、青森県防災理事会の理事をやっておりますので、防災という観点からSDGsに関わってきました。観光については新幹線の研究を通して20年以上全国の状況を見ています。今日は様々な方がいらしているので考え学びを深めていただければと存じます。よろしくお願いいたします。

【参考：櫛引教授講演資料】

【福田主査】
　函館市教育委員会世界遺産登録推進室の福田です。文化財保護、特に遺跡の発掘調査や史跡の保存など、そういったことに関わって参りました。
　縄文文化は、狩猟・漁労・採集による長期間にわたる定住生活の達成実現をした社会で、1万年以上にもわたって同じ状況で持続可能であったという点において、世界的にも稀有な文化です。SDGsの17の目標の中にもいくつか縄文文化で語れるものがあります。どうぞよろしくお願いいたします。

【若井会頭】
　青森商工会議所の若井と申します。私は青森で魚の卸をしている青森魚類という会社をやっています。魚や船を扱う仕事を通して北海道と青森・本州を繋ぐ仕事をずっとやってきたと思っています。
　また、青函ヨットレースもやっております。縄文時代からいろんな交通手段を使って北海道と本州をいろんな形で繋いできたのですが、その中で時間がどれぐらいかかるかということで、昭和63年に青森、函館との間でヨットレースを企画し、現在まで33年続いております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

【田中所長】
　ありがとうございました。それではパネリストの方にいくつか質問させていただきたいと思います。まず、福田主査に質問なのですが、縄文時代は１万年以上も継続したとのことですが、なぜ長期間の持続的な発展を維持できたのでしょうか。

【福田主査】
　資源管理という面で非常に長けていたことが大きな要因かと思います。陸上においては白神山地の豊かな木の実のなる森、動物や植物も沢山あり、非常に生物多様な環境がありました。そして、海では寒流と暖流が混じり合うエリアということで、海洋資源にも非常に恵まれていました。こういった資源をむやみに採っていたのではなく、年間を通して資源管理をしながら持続可能な社会を実現していたことが、遺跡の調査研究から次第に判明してきております。そういったことから、長期間の狩猟・漁労・採集による定住を行うことができたのではないでしょうか。

【田中所長】
　なるほど。だから縄文時代は1万年以上も続いたのですね。私も色々と勉強してみたのですが、先日イコモス勧告で世界遺産登録がふさわしいとされた「北海道・北東北の縄文遺跡群」は共通の文化圏であったとのことですね。津軽海峡を越えて青函の交易・交流がなされていたことが遺跡から見つかっているそうですが、福田主査、当時の交易・交流はどのようなものだったのでしょうか。

【福田主査】
　先ほど若井会頭からもヨットレースによる津軽海峡横断というユニークなお話を伺いました。おそらく縄文時代も船を使って航海をしていたと。我々が考えているのはいわゆる丸木舟です。当然泳ぐよりもはるかに効率的に、しかも様々な物を運べるということで、かなり活発な交易や人の動きがあったのではないかと思います。単純に物が移動するだけではなく、人が来てそこに住む、そこで結婚するということもあったりしたのではないかと。縄文時代の早い頃から青函地域というのは密接に繋がっていたということが言えると思います。

【田中所長】
　縄文時代から津軽海峡を越えて繋がってきた証であると考えると、北海道・北東北の縄文遺跡群を両地域で大切に守っていかねばならないと感じたところです。ではここで、若井会頭にお聞きいたします。先日、ユネスコより登録勧告を受けたところですが、これまで世界遺産登録に向けて官民で連携しどのような取組みをされてきたのでしょうか。

【若井会頭】
　三内丸山遺跡が1994年に一般公開され、観光客が来るということで、私が青森商工会議所青年部会長の時に、ボランティアガイドやガイドブック作りを行いました。
　当時、縄文時代は定住していないと学校の教科書に載っており、それが三内丸山遺跡で大きく変わりました。このことを広めていくため、「三内丸山応援隊」というボランティア組織を作りました。「三内丸山応援隊」では、保存・活用とガイド、縄文時代の生活体験学習、ミュージアムショップ作りを行い、三内丸山の魅力をお伝えするとともに、それを日本国内で広めてもらうという活動をやってきました。
　2006年に「世界遺産を目指す会」が青森で発足し、今では、一般企業62社からお金をいただくとともに、1人1000円で8000人を超える一般の方にサポーターになっていただいています。さらに、県内全ての遺跡にボランティア組織があり、住民との関わりがしっかり完成してきています。皆が各遺跡に対して誇りを持ち大事にしている、そういった運動が根付いてここにたどり着いたなと。やはり最後は、官と市民の人達が、遺跡に対してどれだけの誇り、思いを持ち取組んできたか。それをイコモスにわかってもらうことが、とても大事な活動だったと思っております。

【田中所長】
　これまでの取組みが今回の登録勧告に繋がったことがよくわかりました。さて、世界遺産登録後、青函地域の交流がより一層深まることが期待されるところですが、若井会頭、ビジネス面での両地域の結びつきは今後どうなるでしょうか。

【若井会頭】
　青森・函館両会議所では、人的交流を積極的に行っており、北海道新幹線をターニングポイントとして、平成25年から青森・函館の企業を結びつけ、商品開発や技術提携を行うことを目的とした「青函パートナーシップ連携事業」をやって参りました。平成31年までに延べ382社が参加し、青函連携商品が15品生まれています。得意分野、特産品を上手くコラボさせ、新商品を作りだしています。また、現在は、JR東日本青森商業開発の協力を得て、物産展や情報発信を行っています。
　世界遺産登録を契機に、コロナ収束後、沢山の方が訪れるのではと思います。それに対し、例えば「青森県の遺跡を車で2泊3日で回れます」といったコース、北海道も入れたコース、自転車コース、歩くコースなど様々な旅行商品を街の特性を活かしつつ、食事処や宿泊施設も上手に網羅して開発できれば良いのではと思います。要するに、17遺跡の連携を活かし、訪れた方に対し、より良いサービスを作り出すことも必要だと思っています。

【田中所長】
　ビジネスといえば、世界遺産登録は観光にも良い影響があると思います。縄文時代が持続的な発展をしてきた時代として知られている点を活かして、世界的に注目されているSDGsのシンボル的な場所として遺跡に観光客を呼び込むことは可能でしょうか。その場合、どのような点を観光客の方へＰＲしていくのがよいでしょうか。奥平先生のお考えはいかがでしょうか。

【奥平准教授】
　SDGsは「持続可能な」という所が強調されますが、「開発」が後ろに付きます。「開発」が付くということは、「人が入って何かをする」という意味を強く持っているということです。ただ、SDGsの場合、「続ける」ことがメインとなるので、縄文時代が1万年以上続いたことをアピールすることが大事だと思います。
　また、縄文人の「高い精神性」をアピールしても良いと思います。文化があったということは、当然、対立があったのではないかと、それは土偶から分かるのではないかと思います。土偶をもう少し前面に出し、土偶同士が似ているかどうか、見る方に問うシステムがあってもいいと思います。また、土偶の違いを子供達にアピールし、例えば塗り絵コンテストを行うなど、様々なことに取り組めると思います。

【参考：福田主査講演資料】

【奥平准教授】
　これを続けるのであれば、如何にコストを下げ、遺跡を守りつつ、人を沢山呼び込めるかという点を考える必要があると思います。

【参考：福田主査講演資料】

【田中所長】
　なるほど。私自身、北海道・北東北の縄文遺跡群を魅力的な観光スポットであると考えていますが、同時にアクセスの難しさも感じています。奥平先生は、青函地域で一体となって北海道・北東北の縄文遺跡群を観光に活かしていくには、どのような点が課題になるとお考えでしょうか。

【奥平准教授】
　遺跡と街をどう繋ぐのかについて、一つ一つの遺跡がかなり離れた場所にあるので、それをどのように近づけるかが問題だと思います。青森の三内丸山はいいのですが、他の遺跡では二次交通の問題が生じてくるのかなと。駐車場が整備されていますのでレンタカーの使用者が多いと思いますが、自転車を使って回る場合、自転車の貸出方、メンテナンスをどうするのかというところが大事になってくると思います。また、沢山の団体客が来るのは、SDGｓの観点ではあまり良いことではないので、個人客が沢山来る前提で構築していくのがベストかと思います。
　もう一つは、日本とよく似た精神世界を持つアジアの人達よりも、違った精神世界を持つキリスト教文化圏、欧米圏へアピールしていくことです。青森・函館はあまり欧米からの観光客が来ていないので、そこへどうプロモートしていくのか、大勢の欧米の方が来た場合の対応が次の課題になると思います。

【田中所長】
　ここまでビジネスや観光の今後の展望についてお聞きいたしました。あらゆる経済活動において、持続的な開発、SDGsといった観点が欠かせないのではと思います。先ほど、福田主査に縄文時代が持続的な発展ができた理由をお聞きしたところです。SDGsといった観点で考えた場合、縄文人のどのようなところに現代人は「持続的な発展」を学ぶことができるでしょうか。

【福田主査】
　高度成長期以降使い捨て文化・習慣が身に付いていること、海洋プラスチック問題などゴミ問題も恒常化していることが、人類だけではなく様々な生態系に悪影響を及ぼしています。縄文人に関して私と同じ考えの研究者も多いと思うのですが、「もったいない」といった「ものを大切にする」という観念から、実際にどういう行動を我々がとれば、様々な問題が無くなるのか、環境にどう良い影響を与えていくか、そういったことを考える中で無駄を省く、そしていかに現代的な合理的な暮らしを実現していくかということが大切かと思います。おそらく、縄文人の考える合理性とはかなり異なると思いますが、現代の技術や知恵を使って取り組めるのではないかと思います。

【田中所長】
　福田主査より現代人が縄文人に学ぶ点をお聞きしたところですが、櫛引先生はどのようにお考えでしょうか。例えば、現在、新型コロナにより社会的に大きな変化が起きていますが、この変化に対応し持続的な発展をするにはどのようなことが必要でしょうか。

【櫛引教授】
　縄文時代とコロナ時代を見直すと「1万年以上」というキーワードを皆さんおっしゃっています。1万年という時間、時期によって気候の変化もあり、山あり谷ありのなか縄文人は生き抜いてきたということを見直すべきと考えます。
　考古学者の小林達雄さんが、縄文人が自然のあらゆる要素を活用し狩猟採集を行ってきたことを、「縄文姿勢方針」とおっしゃっています。どうやってあらゆる要素を活用し生きていくか、この辺はコロナ時代と見比べてみると共通点と学びのポイントがある気がします。

【櫛引教授】
　最後に、SDGsには「成長」という言葉が付いています。例えば縄文土器の変化を見ると、「これが成長か進化か！」と思う部分があります。「成熟」、「成長と進化」という形で読み替えてみると、コロナも我々にひょっとしたら、色んな「成熟」や「深化」を求めているのかと思うことがございます。

【田中所長】
　持続的な発展を考えた場合、青函地域においては人口減少が最大の課題ではないかと思います。櫛引先生は新幹線の研究をされていますが、両地域を新幹線で結び、交流を活発にすることで人口減少の影響を緩和し持続的な発展に繋げることはできるでしょうか。

【櫛引教授】
　僕は「人口減少社会の再デザイン」というキーワードを最近使っています。日本全体で人口減少は構造的な問題ですが、25万～30万規模の都市で1番人口減少が進んでいるのが函館市と青森市です。どうやって人口減の中で社会を再デザインするのか、その中で新幹線の効果は経済的・合理的要素だけではなく「安心の装置」という機能があります。この中で、例えば札幌や首都圏に固定された呪縛からどう解き放たれるかを考えると活路が開けてくると思います。僕が研究している中で、来週、JR北海道の奥津軽いまべつ駅で、職員の方と僕のゼミ生がワークショップをやります。また、2031年の札幌延伸に向けて、長万部高校生が駅舎デザインの参考にするため、来月16日に新青森駅を見に来るそうです。この高校生に対し、地元としてどんな言葉をかけて、一緒の未来を作るかと考えると、交流はやはり大事です。交流は未来にかける「架け橋」だと改めて感じております。

【田中所長】
　最後に、北海道新幹線に加え縄文遺跡群の世界遺産登録によって両地域の結びつきは益々強くなりますが、こうしたことを上手く活用するにはどのようなことが必要でしょうか。

【櫛引教授】
　北海道新幹線の開業時に色々な交流チャンネルが道南、青森、北東北で出来ましたが、今は多くが消滅しています。それをもう一度復活させること、別のチャンネルで繋がり直すことによって、様々なことができるはずです。例えば青函ディスティネーションキャンペーンがもたらした資産をどう活かすか。目に見えて観光客が来たという効果は限定的ですが、多くの市町村がおっしゃっていたのは、地元町村や対岸町村と繋がり直す機会として重要であったということです。繋がることで、互いに学びながら新しい地域づくりを目指す、このような眼差しというのが非常に重要だと考えます。
　また、「遺跡が散在しているのでアクセスが大変だ」という点では、VRやARいわゆるITを活用して行き来が不自由なところを埋める非常に貴重な取組みが「はこだて未来大学」などでございます。まだまだやれることはあるので、何をやるかしっかり考えていけばいいのかなと考えております。

【田中所長】
　パネリストの皆様、貴重なお話をありがとうございました。それでは、ここで参加者の皆さまからいただいた質問について、パネリストの皆様にお聞きいたします。
　まず、「食料品製造をしており、縄文スイーツを作る活動もしています。どのような活動をすれば世界遺産登録後に持続的な経済効果を出していけるのか、他地域の事例などあれば教えて頂きたいです。また、函館と青森でコラボして盛り上げるなどもあったほうがいいでしょうか。その場合はうまくマッチングできる方法を改めて考えたいです。」との質問をいただいております。この質問に対し若井会頭と福田主査はどのようにお考えでしょうか。

【若井会頭】
　青森では、函館の乳製品を青森に持ってきて、より良い商品を作るということをしています。青森にも、カシス、りんごなどの名産品がありますが、それを函館の方々が上手に使い商品開発を進めるというのが一つあるかと思います。

【若井会頭】
　また、各縄文遺跡にちなんだ名物、新商品も作り出して欲しいと思います。自分の所で採れるものだけでなく、17遺跡のコラボを使い「縄文」をキーワードとした新商品の開発も面白いのではないでしょうか。その時に、各遺跡の特徴を上手く捉えて商品作りをやってはいかがでしょうか。
　もう一つは、販売先の「どこに共通するか」を常に頭に入れながら商品開発をやっていただければ面白いと思います。

【福田主査】
　全国各地の縄文遺跡や色んな遺跡、史跡のある所に行くと、それぞれの特徴や個性を生かした商品がお土産屋さんに並んでいます。特に縄文の場合は、栗とか胡桃とか、時にはトチの実など、木の実を使った商品が多く見受けられるようです。それだけでなく、やはり現代の特産品を上手くアレンジしていくことも大事だと思います。青函両地域の方々で一緒になってコラボできる商品を作る、そしてそれが将来銘菓になっていく、ということがあるといいのではと思います。

【田中所長】
　次の質問です。「コロナ禍により、飲食店、宿泊施設等が大きな影響を受けている中、縄文遺跡群の世界文化遺産登録を契機とした青函地域の活性化策としてどのような取組みが考えられますか。」ということで、奥平先生と櫛引先生のお考えを伺えればと思います。

【奥平准教授】
　特効薬は無いですが、即効性を考えるとイベントをどう開くのかを考える時期がきていると思います。現在、17遺跡がバラバラにある状態ですが、世界遺産に指定されることで一つになるので、17遺跡一体となったイベントをやってはいかがでしょうか。例えば、「縄文フェスティバル」というものをやってもよいのかなと。どうやって予算を獲得していくかですが、クラウドファンディングという方法もございます。地道にそういう活動を経過報告をしながらやっていくと面白いと私は感じています。
　また、持続的な情報発信も必要です。例えば、現在、私が関わって、日本人向けの「北海道・北東北縄文遺跡ガイドブック」を作っています。ここにはスイーツやお土産の情報が全部入っている。言うなれば「地球の歩き方 北海道・北東北版」みたいなものです。それを多言語化して、今度は外に出していくことも考える、また、Facebook等で発信していくこと、それを続けることが大事だと私は考えます。

【櫛引教授】
　シニアの方がワクチンをもうすぐ打ち終わるからと、ムズムズして待っているという声を聞きます。まずは、こういう方々にターゲットを絞り、例えば、「縄文は遠くかけ離れたものではなくて、昭和の暮らしに結構近かったよね」という視点からの売り込み方もあるのかなと。
　2つ目は、マイクロツーリズムです。人の動きには、やはりしばらくブレーキがかかり続けるはずです。まずは近場で地元を再発見してもらう。面白い遺跡が沢山あるので、地元の方に来てもらうことを着実にやっていく必要があります。
　また、VRなどのIT技術を使った観光と物販は相性がいいです。「ネット環境で観光したついでに、ワンクリックすれば見たものがすぐ買える」といった導線作りをしておけば、漏れていくお金、出ていかないお金を、動かしていける。これがマイクロツーリズムと繋がると、「地域を理解し愛する動き」と「地域のお金を動かす動き」が関連づいてくる。そういった視点ってすごく大事じゃないかと思いました。

【田中所長】
　本日のテーマである「縄文時代」や「SDGs」は、これからも引き続き関わる必要がある重要なテーマです。来年も青函みらい会議を引き続き行えればと思います。パネリストの皆様、ご参加して頂きました皆様、本日は本当にありがとうございました。